

## 研究ノート

## 米国テキサス州に入植した初期の日本人の移住生活

—米作農家以外の人々の活動に焦点を当てて—

武井 勲<sup>※1</sup>

An Investigation of the Earliest Japanese Immigrants and Visitors in Texas

Isao TAKEI<sup>※1</sup>

## ABSTRACT

This study offers a descriptive account of the earliest Japanese immigrants and visitors in Texas during the period between the latter part of the nineteenth century and the first half of the twentieth century. This paper gives an overview of the early Japanese settlers and visitors by region, including Dallas, Houston, Galveston, San Antonio, the Rio Grande Valley, El Paso, and Austin. Further to a close examination of the published references, data includes fieldwork and interviews conducted by the author, and information obtained from the University of Texas at San Antonio (UTSA) Institute of Texan Cultures and UTSA Special Collections. The findings bring to light new information on the entrepreneurial Dyo family who lived in El Paso in the early 20<sup>th</sup> century. The author introduces the earliest Japanese immigrant to Austin, second-generation Alan Yamato Tani-guchi, who moved from the Rio Grande Valley in 1959 to start his career at the University of Texas, followed by second-generation Kaoru Dyo who became the first Japanese physician in Austin. The findings provide insights into the life experiences and socioeconomic attainments of Japanese immigrants to the United States. Future research supports the need to document the under-represented trajectory of Japanese Texans who now include fourth-generation Yonsei to preserve and provide a better understanding of the social changes recorded and experienced up to the present day.

キーワード : テキサス州 日本人 端緒期

## はじめに

本稿は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、米国テキサス州に入植した端緒期の日本人の活動および移住生活について、筆者自身の調査を交えながら明らかにしようとするものである。

1868年の明治維新により日本の国内情勢が激変すると、1871年には明治天皇が国民の見聞を広めるべく、海外渡航を奨励した<sup>1</sup>。1884年に明治政府が労働目的の海外移住を正式に認可すると、米国が海外移住の主要目的地の一つとなった。

貿易相手としての日本とテキサス州との関係は、1895年に、日本綿花株式会社がテキサス州産の綿花の輸入を開始することで始まった。翌年には、同社の常務取締役の志方勢七という人物が現地に赴いているという記録がある<sup>2</sup>。しかし、テキサス州における日本人の活動の歴史は、それ以前の1880年代から始まっている。

テキサス州に入植した端緒期の日本人は、1890年のセンサスに記録されている。だがその数はわずか3人で、同州の中央部北に位置するダラス郡

※1 日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授 Associate Professor, Department of International Studies, College of International Relations, Nihon University

とタラント郡、および州の最南端に位置するキャメロン郡にそれぞれ居住していた人達に過ぎない<sup>3</sup>。ダラス郡とタラント郡は、今日では世界でも有数の経済の中心地である「ダラス・フォートワース複合都市圏」に属している。また、キャメロン郡は「リオグランデ平原」と呼ばれる肥沃な土地が広がった、野菜や果物、綿花の生産地として知られている。



地図1 1880年代から1910年代（テキサス州への初期の日本人入植期）に活動が展開された都市および地域\*

\*ただし、州都オースティンへの最初の入植は1959年のことである。

本稿では、その後、テキサス州のダラス、ヒューストン、ガルベストン、サンアントニオ、リオグランデ平原、エル・パソ、そして州都オースティンの各地域に入植した初期の日本人について、検討する。だが1903年にヒューストン郊外のウェブスターへ入植した、米作の草分けである西原清東、大西理平、そして西村庄太郎に関する活動は、既に十分な記述があるため、本研究では取り上げない<sup>4</sup>。

テキサス州の日本人に関して、新日米新聞社編『米國日系人百年史』（1961年）とThomas K. Walls著*The Japanese Texans*（1987年）という2つの主要文献がある。本研究ではこれらの既存の資料を精査した上で、テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の展示パネルや同校のスペシャルコレクション、筆者による現地視察やインタビュー等から得られた情報を加えることにより、テキサ

ス州に入植した初期の日本人の活動を明らかにすることを目指している。

これまでの筆者の取材の結果、文献でわずかに触れられているだけだった、北条氏の子孫にあたる條（じょう）家について、3世の子孫に対する取材から、彼らの1世と2世の家族に関する新たな情報を得ることが出来た。また、既存の文献では言及されていなかったオースティンに入植した端緒期の日本人について、筆者の取材により該当する人々を新たに特定することが出来た。

加えて、先行文献には掲載されていない数名の人物の写真を入手した他、1914年に志賀重昂がサンアントニオのアラモ砦に献納した石碑とその案内板を直接確認することが出来た。こうした資料を交えながら、テキサス州の各地に入植した、端緒期の日本人の活動に関する検討の結果を以下に示したい。

## 1. ダラスの日本人

テキサス州北部に位置するダラスには、第二次世界大戦以前から三井物産等が主に綿花の買い付けを目的とした営業所を構えていた。また、日本美術店や洋食店も数軒存在したが、様々な労働に従事した者を合わせても、10人以上の日本人が居住したという記録は見当たらない<sup>5</sup>。

### （1）農家の塚原金太（1885年）と医師のキンヤ兄弟（1900年）

ダラスに最も早く定住した日本人は、上述の1890年のセンサスで3人の中の1人としてダラス郡で確認された、塚原金太である。金太は明治政府により海外移住が認められた翌年の、1885年に渡米した。彼はダラス南東部のハニー・スプリングスにあったオーバートン農場で働いた<sup>6</sup>。

1900年には、前年に済生学舎（現在の日本医科大学）を卒業したばかりで、26歳の弟のキンヤが合流した。1904年にベイラー大学医学部に入学し、1906年に同校を卒業したが、当時の医学部は一般的に2年制だったようだ。キンヤは研修医を経て、1908年にダラスのハニー・スプリングスで開業医として働いた<sup>7</sup>。

## (2) 美術商のムタ・ヒデオ (1900年)

当地におけるもう1人の最初期の人物が、ムタ・ヒデオである。1870年に佐賀県で生まれたムタは17歳で渡米し、西海岸で働いていた。ムタは1900年にダラスでレストランを開くと、後に東洋美術品店「オリエンタル・アート・カンパニー」を開き、ダラス商工会議所にも加盟した。彼は法律により帰化市民にはなれなかったが、常に人頭税(全ての国民1人につき一定額を課す税金)を納めていた<sup>8</sup>。

真珠湾攻撃の直後、州政府当局は42年間ダラスに居住していたムタに美術品店の閉店を命じた。しかし彼が米国の愛国的な市民であるということを訴える嘆願書に200名以上の署名が集まったことで、2日ほどで店を再開することが出来た。ムタは1951年に亡くなるまで、ダラスでビジネスマンとして活躍した<sup>9</sup>。



写真1 ムタ・ヒデオと妻ヤエ、1948年 (提供：テキサス大学サンアントニオ校のスペシャルコレクション No. 079-0324)

## 2. ヒューストンの日本人—レストラン経営で成功した岡崎常吉 (1890年代) —

1890年代にヒューストンに移住した、岡山県出身のトム・ブラウン・岡崎 (岡崎常吉) は、日本人コミュニティのリーダー的存在であった。彼は店名こそ「ジャパニーズ・レストラン」であったが、10~25セントという安価な価格でアメリカ風の料理を提供するレストランを経営し、繁盛した。ヒューストンに到着して間もない日本人の多くが、彼の元で働いた<sup>10</sup>。

岡崎は1911年に日本の美術品を取り扱う店を開くと、次いでその近くに、日本の美術品や茶葉を

扱う会社を共同で設立した。この会社には、藤野順蔵と小西吉松という2人のディーラーがいた。その後も岡崎は更に2つのレストランを開業し、その内の1つは「イーグル・カフェ」という名の「チャプスイ・パーラー」であった<sup>11</sup>。

1907年頃には、岡崎はヒューストン郊外の2か所で米作にも手を出した。彼は同じ岡山県出身の友人、三道國右衛門を説得し、2つの農場のうち1つの経営のために日本を発つよう勧めた。日露戦争では満州で軍に従事していた当時23歳の三道は、仕事の限られていた日本に戻らず、ヒューストンに向かった。ところが岡崎の米作事業は、雨の多い異常気象で大失敗に終わった。三道は岡崎のレストランを手伝い、後に独立して自身のレストランを構えた<sup>12</sup>。

岡崎に仕えたもう1人の日本人が、松本乙吉である。彼は1898年に18歳の時、ハワイのサトウキビ農場で働き始めた。松本はその後サンフランシスコに移りウェイターとして働き、次いでアメリカ人大佐の付き人として働いた。資金が貯まると、郷里の友人2人と共同でレストランを開いたが、数年後に1906年のサンフランシスコ大地震に見舞われ、松本らの店は焼失した。彼らは苦境を耳にした岡崎の誘いでヒューストンに移り、第一次世界大戦の後まで岡崎のレストランで働いた。私財を蓄えた岡崎は余生を日本で過ごすべく帰国し、松本ら3人は岡崎のレストランを引き継いだ<sup>13</sup>。

岡崎はまた、1903年頃自身が営む洋食店で、サンフランシスコから流れてきた亡命共産主義者の片山潜を、ウェイターとして雇っている。岡崎は日本人としては風采が格別良く、軍人でもないのに陸軍少尉の写真を店に掲げて威張っていたという<sup>14</sup>。

## 3. ガルベスタンの日本人—美術商の秋野熊雄 (1917年) —

州南東部の港町ガルベスタンには、1907年以降大阪商船の南米航路船が入港していた。第一次世界大戦後に米国との貿易が盛んになると、多くの日本の貨物船が入港し始め、30人ほどの日本人がガルベスタンに滞在していた時期もあった<sup>15</sup>。

1910年頃からは、ガルベスタン西方のヒッチ

コックの町で安藤兄弟他数人の農家が野菜耕作に従事していたが、彼らは日本人による米作が盛んに行われていたヒューストン近郊のウェブスターから移って来た人々であった<sup>16</sup>。

このように、1910年頃には船員や船客として当地に足を踏み入れた者や、新たな農地を求めて郊外に移住して来た者がいたが、確かな記録は存在しない。

ガルベストーンに入植した端緒期の日本人として、佐賀県出身でサンフランシスコの日米新聞元記者、通称「ガルベストンの仙人」こと、秋野熊雄が挙げられる。彼は小池実太郎という人物が、日本の美術品を米国に売り込む事業を始めたことに影響を受け、1910年にダラスで日本美術店を開業した。秋野はまた、全米各地で商品を販売して回った。1917年にはダラスからガルベストーンに移住し、再び日本美術店を構えた<sup>17</sup>。

秋野は真珠湾攻撃の3日後に抑留され、州内のフォート・サム・ヒューストン（サンアントニオ）やケネディ、ニューメキシコ州のサンタフェなどの収容所に収容された。秋野は1946年2月に釈放されるとガルベストーンに帰還し、海辺で貸しポート屋を経営する傍ら土産物を販売し、一時はゲーム店を6か所経営した<sup>18</sup>。

#### 4. サンアントニオの日本人—志賀重昂がアラモの英雄を讃えるために訪問（1899年）—

州中央部南に位置するサンアントニオにおける端緒期の日本人については、1910年頃に国広という人物が食料品店を経営していた他、数人が居住していたということしか分かっていない<sup>19</sup>。

一方、サンアントニオを訪れた最初の日本人が志賀重昂（「しげたか」または「じゅうこう」）であり、市内のアラモ砦を訪れ、後年その激戦の未散った勇士の霊に石碑を建てて讃えたことで知られている<sup>20</sup>。志賀（1863年～1927年）は岡崎藩士の父を持ち、札幌農学校を卒業、地理学者、評論家、早稲田大学教授の肩書を持つ人物である。彼が殉難烈士の碑を建てた経緯を、以下に示そう。

1899年、志賀は米国踏査の途中テキサス州の不便な地をロバで旅し、1836年のアラモの戦い（テキサス独立戦争中にメキシコ共和国軍とテキサス

分離独立派の間で行われた戦闘）の英雄たちに敬意を表するため、サンアントニオを訪れた。志賀は、出身地である愛知県岡崎市の近くで1575年に起きた長篠の戦いの英雄に感銘を受けていたが、それと同じ無私の勇気と決死の忠誠心を、アラモ守備隊の中に見出したのであった。

より詳しいあらすじは、以下の様なものである。長篠の戦いで、武田勝頼が長篠城を攻め落城が迫っていた時、鳥居強右衛門（とりいすねえもん）という武士が岡崎城の徳川家康を訪ね、援軍の依頼をした。城中で一泊するよう勧められるも、すぐさま帰路についたところを武田軍に捕らえられてしまう。「援軍は来ないから早く降参しろ」と城に向かって言えば、助けてやるし、重く用いてやろうと言われて、長篠城の前に引き出されたのであった。強右衛門は「もう近くまで援軍は来ているぞ。もうしばらく頑張れ」と叫んだため、磔（はりつけ）になった。援軍が来て、武田軍は総崩れになった。

同様の出来事が、テキサスがメキシコから独立するアラモの戦いにもあった。メキシコ軍がアラモの砦を取り囲み、陥落しそうな時、ジェームス・バトラー・ボナムという兵士が本隊に伝令に行った。本隊も苦戦で援軍は出せなかったが、ジェームスも強右衛門と同じように、すぐ帰って司令官に「あなたと共に戦死するため帰ってきました」と援軍の来ないことを報告し、全員戦死したのだった<sup>21</sup>。

志賀は、米国の「アラモの戦い」が日本の「長篠の戦い」と大変似ていることに感激して、1914年、両国の勇士を讃える詩文を刻んだ石碑を、アラモ砦に献納した。石碑に使われた花崗岩は、長篠付近で採石されたものである。また土台の石は、鳥居強右衛門の墓の近くで採石されたものである。

1990年11月15日、アラモ砦で志賀重昂建碑75周年記念式が行われ、その席で日米親善交流の証として、志賀重昂の思いを長篠の地にも分けて移そうと、砦跡にそびえるライブ・オーク（樫の木）の種子（どんぐり）がアラモ側から長篠城跡へ贈られた<sup>22</sup>。種子は育苗の後1992年に長篠城跡に植樹され、記念碑が建てられた<sup>23</sup>。

碑文のコピーは、アラモに問い合わせることで

入手が可能である。もしくは、『米國日系人百年史』(1961:1233)を参照されたい。



写真2 サンアントニオのアラモ砦 (2022年8月筆者撮影)



写真3 アラモ砦に残る、志賀重昂が贈った石碑と案内板 (2022年8月筆者撮影)



写真4 アラモ砦のライブ・オーク (2022年8月筆者撮影)

## 5. リオグランデ平原の日本人

テキサス州最南の都市ブラウンズビルから北西方向のマッカレンにかけての、直線で70マイル(110キロメートル)ほどの米墨国境地域は、リオグランデ平原として知られている。今日では豊かな農地が広がっているが、元々は未開の低木地帯であった<sup>24</sup>。

それでも1904年にヒューストンからミズーリ・パシフィック鉄道が開通し、土地開発業者がリオグランデ川から引いた用水路を整備すると、野菜や果物、綿花の一大産地となった<sup>25</sup>。鉄道開通前には1エーカー当たり1ドル前後の価値しかなかった土地には、100ドルの値が付いた<sup>26</sup>。

### (1) 1890年のセンサスで確認された日本人

リオグランデ平原に最も早く定住した日本人は、上述の1890年のセンサスで3人の中の1人としてキャメロン郡で確認された人物である(氏名不詳)。この人物は、興味をそそるような地域の良い情報を手紙にしたため、日本人の移住を促したようである。後に、数家族がリオグランデ平原のハーリンジン、サンベニト、ブラウンズビル、ミッションに入植し、1,200エーカー(1エーカーはおよそサッカーグラウンド1つ分に相当する)ほどの農場が作られたと、1905年(明治38年)の『渡米雑誌』に記されている<sup>27</sup>。

このように、リオグランデ平原が魅力的な農地として生まれ変わった直後の1904年から1905年頃には、既に数人の日本人が入植していたことが伺える。しかしながら、具体的な人物名や現地での活動を特定出来る端緒期の日本人は、以下に挙げる2名である。

### (2) みかん栽培の宮本平四郎(1908年)

1908年に、リオグランデ平原に入植した日本人は、千葉県出身の宮本平四郎である。宮本は当地に移住する以前、メキシコと米国の他の地域で6年間を過ごしている。米国ではミズーリ州のセントルイスにあるミズーリ植物園と、ヒューストンの尾崎日本美術雑貨店で働いている<sup>28</sup>。

宮本は美術店のセールスマンとして各地を行商する中で、当時ヒューストン地方で新居三郎、西

原清東といった人々が日本の温州（うんしゅう）みかんの苗木を大量に栽培・販売し、成功していることを知った<sup>29</sup>。リオグランデ平原のマッカレン付近の小さな町ミッションでもかんきつ類が植えられているのを目にした宮本は、当地の有望性に目をつけ、温州みかんの苗木を栽培・販売する目的で、1908年にミッションに20エーカーの土地を購入した<sup>30</sup>。

宮本は当初、他の者を主任として置き、自らは常駐しなかった。それでも後に事業の拡大を機に定住し、1924年頃まで園芸場を続けたが、1925年にメキシコに移った。少なくとも5人の日本人が宮本に説得されて、現地に移住している<sup>31</sup>。

### （3）1960年に黄綬褒章の荣誉 下津卯一（1909年）

1879年に大阪府に生まれた下津卯一は高校を卒業後、1904年にサンフランシスコに渡ると、直ちにコロラド州立A&M大学に入学した。彼は在学中、それまで低木地帯でしかなかったリオグランデ平原が、土地開発業者による灌漑によって豊かな農地へと変貌を遂げたという話を、ある教授から聞いたことがあった。そこで1909年に卒業すると同年、この教授の勧めでリオグランデ平原の可能性を信じて、マッカレン付近のサン・ホアンに移住し、約2年間農業に従事した<sup>32</sup>。サン・ホアンは、上記の宮本平四郎が入植したミッションから東方に20キロメートルほど離れた所にある。

下津は次いで、ハーリンジン近くのサンベニト（正確にはサンベニトの南西のレンジャービル）に移住し、野菜やカンタロップ、綿花などを生産した。後に長男と次男の協力を得て、耕作面積は約1,000エーカーに及んだ<sup>33</sup>。

下津は1916年に結婚のために一時帰国すると、辻高子という名の東京女子学院卒の29歳で、秘書として働いていた女性と出会った。当時の日本では、女性が29歳まで未婚でいるのは珍しかったが、女性が大学を卒業し、仕事に就いていたことは尚更珍しいことであった。高子は独立心が強く、冒険心旺盛な人物だったので、こうした資質を備えた男性を慕っていたようだ。高子は、米国に移住して現地の大学を卒業し、農業を始めるという下

津の進取の気性を尊敬していたので、求婚を受け入れた<sup>34</sup>。

翌1917年、高子はリオグランデ平原最初の日本人妻となると、同年には日本人最初の2世となる、長女の雪子が誕生した<sup>35</sup>。

4人の息子のうち、長男のケネス・健一と次男のハリー・春雄は父・卯一の農園を引き継いだ。また2人は農作物の梱包・配送業にも携わった。加えて、ハリーは地域の農業会社が所有する6,000エーカーの土地を管理した。下津家は日本の習わしに従い、庭を草木や花で彩り、多様な商売で地域経済の振興に貢献した<sup>36</sup>。

卯一はサンベニト日系人農業生産販売組合副会長を務めるなど、地域の日本人に対する多年に渡る功勞により、1960年に日本政府から黄綬褒章を授与された<sup>37</sup>。



写真5 長男のケネス・健一、1967年（提供：テキサス大学サンアントニオ校のスペシャルコレクション No. 068-3006）

## 6. エル・パソの日本人

テキサス州の最西端に位置するエル・パソは国境の都市であり、リオグランデ川を挟んでメキシコのチワワ州最大の都市、シウダー・フアレスの対岸に立地している。

日本人が当地に定住した時期は、1880年代にさかのぼる<sup>38</sup>。日本人の移民労働者を制限する日米紳士協定が締結された1908年以前には、多数の日本人がメキシコからエル・パソを経由して米国に

入国し、その中には、一時的にせよ当地に居住した者も存在した<sup>39</sup>。また、構想は失敗に終わったものの、1903年には米国有数の絹の産地を目指した町の有力者たちが、日本人の移住を促している<sup>40</sup>。

早くから日本人がエル・パソに定住した要因が、メキシコでの労働に対する不満であった。メキシコへの日本人移民は、1901年からの7年間で1万人に達していた。しかし半数以上は、契約が終わらないうちに逃亡している<sup>41</sup>。多くは鉄道路線の建設に従事したが、条件が過酷な上に、給料は安かったからである。こうした人々がより良い仕事を求めて、エル・パソ経由で米国に入国し、大部分はカリフォルニアを目指したが、エル・パソを含むテキサス州内に留まった者もいた<sup>42</sup>。

しかし、日本人にとってメキシコからの米国への入国は決して容易なものではなく、それには日露戦争(1904-1905年)が関連していることは興味深い。日露戦争後に日本兵が任務から解放されると、多くは日本に戻らず、経済的成功を夢見て米国に向かった。ところが、一文無しの状態の日本人が大挙して押し寄せたサンフランシスコの入国管理局は、将来的な公的負担の増加を口実に、彼らの入国を拒否したのであった。サンフランシスコで米国への入国を拒否された日本人は、カナダやメキシコ(特にフアレスからエル・パソ)経由で入国していたが、1907年にはこうした入国ルートも連邦政府によって非合法とされた。エル・パソの地元紙*El Paso Herald*は、この規制によりエル・パソ経由で米国入りを目指す、毎月約500人とされる日本人の入国が阻止されるとの推測を報じた<sup>43</sup>。同年には、テキサス州のイーグル・パスで55人、ラレドで29人、サンアントニオで8人、そしてエル・パソで7人の日本人が逮捕され、国外追放のためサンフランシスコに送られた<sup>44</sup>。

当時の米墨国境地帯では、日本人の密入国を手助けすることで金儲けをしていた人々がいて、一般の市民に限らず、列車の車掌や入管の職員なども関与していたという。検挙された日本人はカナダに向かうために通過するだけだと言いつたが、多くは日本に強制送還された<sup>45</sup>。

数年後の1910年から1917年にかけてメキシコ革命が起こると、農業や鉱業で成功していた日本人

が集団でエル・パソ及び付近へ避難し、農業に従事したり、食料品店を開いたりした<sup>46</sup>。それでも、1916年に実施されたエル・パソの戦時特別センサスによると、日本人は1910年の14人から41人の増加に留まっている<sup>47</sup>。こうした数値から、メキシコから、もしくはメキシコ経由で米国に入国した日本人のほとんどがエル・パソ以外の目的地に向かったと推測出来る。

このように、エル・パソは様々な理由により古くから多数の日本人が足を踏み入れた、テキサス州の中でも珍しい地域である。こうした特徴を持つ当地における端緒期の日本人は、どのような活動をしていたのだろうか。

### (1) 竹細工職人の土屋秀吉(1895年以前)

エル・パソにおける最初期の日本人は、静岡県出身で叩大工(たたきだいく)の土屋秀吉である。土屋は1885年に渡米すると、まずサンフランシスコで餅菓子屋を始め、当時盛んであった女郎町で売り歩いて一儲けしたそう。養蚕にも手を付けたが失敗し、ロサンゼルスに移ると、そこで日本人が竹細工で随分儲けているのを見て、自分もそれをやりながらニューヨークまで行こうと、ロバに竹細工の材料を積み、60数日間かけてエル・パソに辿り着いた<sup>48</sup>。

『米國日系人百年史』(1961:1232)には、砂漠地帯を含む過酷で長い移動についての記述がある：

途中で食料や水が無くなると、メキシカンやインディアンの家に転がり込み、竹細工を作って与え、飢えをしのぎ、夜は野獣の声に怯えながら、最初の目的地エル・パソを目指した。途中、驢馬が病気で死にかかり、足を取られ失望落胆していると、インディアンが来て小便を吞ませ蘇生させたというほどの、過酷な体験であった。

エル・パソの中心地で編んだ竹細工を売って生活していた当時、日清戦争(1894-1895)での日本軍大勝の報せを聞き、大いに肩身を広くしたというのだから、彼が1895年には当地に居住していたことが分かる。そのうち、メキシコ人の親分と懇意になると、メキシコシティで竹細工を売ること

を勧められ、ニューヨーク行きを変更してメキシコシティへ赴いた。竹細工が大当たりし日本から弟を呼んだが、その弟がメキシコ人の女に金を取られて没落した。エル・パソに戻り綿花畑労働者の周旋などを長く営んだが、後年帰国したという<sup>49</sup>。

## (2) 日本人定住者の先駆け、高橋亀太郎(1916年)

エル・パソにおける日本人定住者の先駆けは高橋亀太郎という人物であり、大東五六と他1名と共同で、1916年にエル・パソのイーグレートと呼ばれるコミュニティで30エーカーの土地を購入したことが分かっている<sup>50</sup>。

高橋亀太郎と共同で土地を取得した大東五六は、1874年に広島県に生まれ、1891年に16歳で渡米した。カリフォルニアの農園や缶詰工場で10年間働いた後、1902年からは、アリゾナ州で家事手伝い業に従事した。エル・パソの土地は賭博で蓄財した金で購入したもので、当地に移住したのはその7年後の1923年のことであった。大東は、1960年の時点でも農業経営を続けていたことが記録されている<sup>51</sup>。

## (3) 米墨両国で食料品店を経営した大久保寮一(1916年)

広島県出身の大久保寮一は1907年にメキシコに渡り、1909年からチワワ州で食料品店を経営した。メキシコ革命の混乱を逃れて1916年にエル・パソに移ると、当地でも引き続き食料品店を経営し、1960年の時点でも営業していたことが分かっている<sup>52</sup>。

## (4) メキシコから移住し、農業で成功した今井武雄

今井武雄は元々、メキシコで鉱業や鉄道建設に従事していた。エル・パソに移ると、レストラン経営と靴修理人をした後、農場を購入し、鶏やウサギの飼育と野菜作りをし、エル・パソ中心部のフォート・ブリスという地域で販売した。今井は、1960年の時点でも農業経営を続けていたことが記録されている<sup>53</sup>。今井がエル・パソに移住した時期は不明だが、メキシコ革命の時期と推測される。

1916年頃には、他にも洋食店を経営したり、家事手伝い業に従事していた日本人が数人いた。当時は1エーカーあたり50ドル程度で、未開墾地を開拓して地域産業に貢献するということで排斥は無く、むしろ歓迎されたという<sup>54</sup>。

## (5) 20世紀初頭にエル・パソに居住していた條家の子孫、條・ロバート・ケント

筆者は現在、テキサス州における日系人の功績と生活体験を記録し、該当する人々については系譜を作成する作業に取り組んでいる。2022年には、ダラスで開業医をしている日系3世の條・ロバート・ケントさんとその家族取材した。その中で、ロバートさんの父方の家族が20世紀初頭に、エル・パソとメキシコに居住していたことが判明した。そこで、当時の條家の状況を以下に記してみる<sup>55</sup>。

ロバートさんの祖父で、1世のケンゾウと、腹違いの兄のツトムは、仙台に住む條クマゴロウという名の裕福な人物の、内縁の妻の子供であった。條という名字は12世紀の北条家に由来し、長い年月を経て、「條」という漢字1文字へと変化した。條氏は20世紀初頭に、相続権を持たない、当時成人となっていたケンゾウとツトムの米国に移住させた。ケンゾウはエル・パソに食料品店を構え、ツトムはメキシコに銀鉱山を所有していたことから、條氏は息子たちに相当な財政援助をしたはずである。

ケンゾウの妻、キムラ・シゲは仙台の長老派教会のミッション系大学を卒業しており、ケンゾウに嫁ぐため米国に向かった。シゲは恐らく「写真花嫁」で、渡米したのは米国政府が1920年に「写真花嫁」への渡米旅券発給を停止した後であったため、彼女の米国居住は認められなかった。そこで彼女だけがメキシコのフアレスに住み、家族と会うために毎日国境を渡っていたのであった。ケンゾウの息子で2世のカオル(ロバートさんの父親)と娘のチエコはエル・パソで誕生したので、生まれながらの米国市民であった。

メキシコに移住してから最初の数年間、ツトムは銀鉱山のビジネスも順調で、繁盛していた。文献にも、ツトムが共同で経営していたチワワ州の



サビナル鉱山が大成功し、5万ドル分に相当する鉱石が週に何回も出たこと、また、ツトムらが大阪の平林らから買収した同じチワワ州のナミキパ鉱山も、有望な山であったという記述がある<sup>56</sup>。

ツトムはメキシコ人と近い間柄となり、メキシコの革命家パンチョ・ビリャ（ホセ・ドロテオ・アランゴ・アランブラ）とも親しくなった。ツトムは数名の日本人を含む仲間と共に、パンチョ・ビリャ暗殺のためのスパイとして米国政府に雇われたが、その試みは失敗に終わった<sup>57</sup>。結局、ツトムの銀鉱山はメキシコ政府によって差し押さえられ、ツトム一家はメキシコ革命の混乱から逃れるためにエル・パソに移ったのであった。一家は最終的にカリフォルニア州のサンタバーバラに移住し、ツトムの子孫の大部分は、今日でもカリフォルニアに暮らしているようだ。

ケンゾウが1941年に病死すると、カオルとチェコはエル・パソで孤児になったので、ツトムを頼ってカリフォルニアに移住した。シゲは依然メキシコに住んでいて、後に同じくメキシコに住んでいた農家のアシダという名の日本人と再婚した。

## 7. オースティンの日本人

既存の文献を見渡しても、オースティンにおける最初期の日本人について言及する記述は見当たらない。しかし筆者の調査から、それは1960年前後に仕事の関係でリオグランデ平原から移住して来た谷口家と、上述の條家の2家族であることが分かった。谷口家は、1世の勇がオースティン市内に日本庭園を造ったことで知られている。

### (1) テキサス大学建築学部を名門に育て上げた谷口・アラン・大和（1959年）

1959年に、オースティンに最初に移住した人物は2世の谷口・アラン・大和であり、そのきっかけは、テキサス大学オースティン校建築学部が彼を非常勤講師として招聘したことであった。

アランは1世の谷口勇・貞世の長男として、1922年にカリフォルニア州ストックトンに生まれた。アランは開戦時、カリフォルニア大学バークレー校で建築学を学んでいたが、学業半ばで母の貞世、

弟の泉と共にアリゾナ州のヒラリバー戦争移住センターに収容された。父の勇は、別の収容所に送られた<sup>58</sup>。

収容中に成人となったアランは、学業を再開するために収容所から解放するよう要請するとそれが実現し、親戚を頼ってデトロイトに移るとデトロイト工科大学に通った。アランは戦後バークレーに復学し、建築学の学位を取得した。彼はサンフランシスコにある一流の建築設計事務所に勤め、1950年代に米国で生まれた近代的なデザインの家々が建ち並ぶ、カリフォルニアの分譲地の設計に携わった<sup>59</sup>。

一方、アラン以外の谷口家の人々は、テキサス州の家族用のクリスタルシティ収容所で再会した。収容生活の中で、勇はリオグランデ平原の肥沃な農地についてよく耳にしていたので、特別に許可を得て収容所の一団と共に、現地を視察した。谷口家は、戦後に収容所を解放された後も、反日感情が残るカリフォルニアには戻らず、農業を行うためにリオグランデ平原に移住したのであった<sup>60</sup>。

1952年、アランと妻のレスリー・悦子は、ブルータウンに住む勇と貞世の近くに住むべく、ハーリンジンに移った。アランは両親のために、目新しいデザインの大きな家を建てたが、その様な建築物は当然のことながら、リオグランデ平原で初めてであった。アランは自身の建築設計事務所を構えると、4年連続でテキサス建築協会のデザイン賞を受賞するなど、成功を収めた<sup>61</sup>。

アランが設計した建築物が有名になると、1959年にテキサス大学オースティン校建築学部が、彼を非常勤講師として招聘した。しかしながら、家族でオースティンに移住するべきか判断し兼ねたので、1959年から1963年までの4年間は単身赴任し、2週間毎にハーリンジンに戻り、週末だけ家族と過ごすという生活が続いた。しかし1961年には教授として正式に迎えられ、オースティンがとても気に入ったので、1963年に家族を同市に呼び寄せたのであった<sup>62</sup>。

その後建築学部長となったアランは、アメリカ建築協会が出資するマイノリティの学生向けの奨学金を拡充させ、マイノリティの学生数を増加させた。また、あえてカリキュラムを緩和させ、学

生が自発的にデザイン能力を高めることを奨励した。こうした努力により、アランは無名に近かったテキサス大学の建築学部を世界レベルの名門に育て上げたのである<sup>63</sup>。

## (2) オースティンで最初の日本人医師、條・カオル一家 (1964年)

上述の通り、エル・パソで生まれた2世の條・カオルは父親のケンゾウが亡くなった後、叔父を頼ってカリフォルニア州へ移住した。第二次世界大戦が始まった当時カオルは高校生で、一家は忠誠質問への回答を拒否したため、アリゾナ州のヒラリバー戦争移住センターを経て、テキサス州にあった家族用のクリスタルシティ収容所に収容された。

戦後、一家はカリフォルニアに戻り、カオルは南カリフォルニア大学に通ったが、学費を工面することが難しかったため、エル・パソに戻り、テキサス鉱業大学（現在のテキサス大学エル・パソ校）に入学した。最終的にはダラスのテキサス大学サウスウェスタン医科大学に通ったが、彼は同校初の、日系アメリカ人医学生であった。そこでカオルは、同じくダラスのベイラー大学医療センターで医療技師として働いていた、2世の北村・アリス・愛子と出会い、結婚したのであった。

カオルが医師の研修期間を終えると、夫妻はリオグランデ平原に戻り、カオルは1955年にハーリンジンで一般診療の開業医を始めた。3世のロバートさん兄弟は、この時に当地で誕生した。カオルが今度は小児科医になるための研修を受けるため、一家は1962年から1964年までガルベストンで暮らした。そして、カオルが小児科の開業医になるため、一家は1964年にオースティンに移った。カオルは1999年に引退するまで、同市で最初の日本人医師として活躍した。

ロバートさんは、当時のオースティンについて以下の様に回顧している：

州の南部や南東部と比較して、1960年代のオースティンには日本人家族、または日本人コミュニティというものは皆無に等しいものでした。私が思い出せるのは、谷口家と日本から来た数人の大学教授くらいです。オース

ティンの高校に通った時、アジア人は私と、Tsaiという名の中国人の男子だけでした。私たち日系人家族にとって、オースティンの環境はリオグランデ平原とは全く異なるものでした<sup>64</sup>。

## おわりに

本稿では、19世紀後半から20世紀前半にかけて米国テキサス州に渡った最初期の日本人について、筆者自身の調査を交えながら検討を試みた。

明治政府により海外移住が認められた翌年の1885年には既に、塚原金太という人物がダラスに居住していた。彼は間違いなく、テキサス州における最初期の日本人の1人である。

本稿では、最初期の日本人を7つの地域に分けながら検討した。その中でもリオグランデ平原については、鉄道が開通し灌漑により魅力的な農地となった直後の1904年から1905年頃には、既に数人の日本人が広大な農場を始めていたという事実は興味深い。

港町ガルベストンでは、1910年頃には船で当地に渡り足を踏み入れた者や、郊外で農業に従事していた者が居たが、具体的に特定出来る人物は、1917年の秋野熊雄が最初である。サンアントニオについては、1910年頃に数人の日本人が居住していたことしか分かっておらず、本稿で挙げた唯一の人物は、日本人として初めて当地を訪問した志賀重昂である。

米墨国境の町エル・パソでは、1880年代から日本人が定住し始めたとされ、また1907年以前は、多数の日本人がメキシコから当地を経由して米国入りした。しかし、具体的な人物は1895年の土屋秀吉を除き、1916年の高橋亀太郎、大久保寮一、今井武雄しか分かっていなかった。しかし筆者の調査から、仙台出身で北条家の子孫である條ケンゾウ・ツトム兄弟が、20世紀初頭にエル・パソに居住しており、後にケンゾウの子供で2世のカオルとチエコが当地で誕生したことを付け加えることが出来た。

州都オースティン初の日本人については、既存の文献では言及されていなかったが、筆者の調査から、その人物は1959年の谷口・アラン・大和で

あることが判明した。また谷口家に次いで1964年に移住して来たのが、オースティンで最初の日本人医師となった條・カオル一家であることも分かった。

筆者は現在、テキサス州にゆかりのある日系アメリカ人と日本人移民に対するインタビューや資料収集を行っている。こうした取り組みを通して、同州における日系人の生活体験の歴史に関する新たな情報を付け加えると共に、該当する人々に關しては、複数の世代をつなげることで系譜の作成を試みている。筆者の最終的な研究目標は、米国における日系人の歩みについて、テキサス州という一地域に焦点を当てることで、彼らの生活史を包括的に理解することにある。

## 註

1. Walls, Thomas K. 1987. *The Japanese Texans*. San Antonio, TX: The University of Texas Institute of Texan Cultures at San Antonio, pp. 24-26.
2. 新日米新聞社編. 『米國日系人百年史：在米日系人發展人士録』. 1961年, p. 1231.
3. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 32-33.
4. 例えば *Ibid.*; 新日米新聞社編, *op. cit.*; 間宮國夫. 『西原清東研究』. 高知市民図書館. 1994年.
5. 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1248.
6. Kawasaki, Masashi. 2004. "Stories of Asian American Physicians at Baylor University Medical Center." *Baylor University Medical Center Proceedings*. 17-4:432-443, p. 433; Walls 1987, *op. cit.*, p. 33. 本稿に記載されている岡崎常吉、三道國右衛門、塚原金太、藤野順藏、松本乙吉の5名の漢字氏名は、以下を参照した. T・K・ウォールズ著／間宮國夫訳. 『テキサスの日系人』. 芙蓉書房出版. 1997年.
7. Kawasaki, *op. cit.*, pp. 432-433.
8. テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の展示パネル“1900 Hideo Muta of Dallas.”
9. *Ibid.*; Walls 1987, *op. cit.*, p. 154.
10. Brady, Marilyn Dell. 2004. *The Asian Texans*. College Station, TX: Texas A&M University Press, p. 41; Walls 1987, *op. cit.*, p. 33.
11. Walls 1987, *op. cit.*, p. 34. チャプスイ (Chop Suey) とは八宝菜に似たメニューで、中国料理店の店名によく使われていた.
12. *Ibid.*, p. 35.
13. *Ibid.*, pp. 35-36.
14. 新日米新聞社編, *op. cit.*, pp. 1232-1233.
15. *Ibid.*, p. 1247.
16. *Ibid.*
17. *Ibid.*, pp. 1247-1248.
18. *Ibid.*, p. 1248.
19. *Ibid.*
20. 志賀重昂については、『米國日系人百年史』(1961:1231-1233) および Walls (1987:36-37) を参照のこと.
21. 長坂一昭. 「志賀重昂と郷土岡崎」. 岡崎大学懇話会主催 平成21年度 「岡崎学～岡崎を考える」. 2009年, p. 18. <https://www.okazakicci.or.jp/konwakai/21okazakigaku/21-2.pdf>
22. ライブ・オークはカシヤカシワなどの一種で、アメリカ南東部大西洋沿岸とメキシコ湾岸地域に分布する. 材は強く重い.
23. 新城市 国指定史跡長篠城跡の案内 <https://www.city.shinshiro.lg.jp/mokuteki/shisetu/shiryokan/nagashinojyoshi/goannai.html>
24. Walls 1987, *op. cit.*, p. 106.
25. 当地で生産された主な作物はキャベツ、カンタロープ (マスクメロンの一種)、キュウリ、トマト、豆類、ピーマン、カボチャ等で、ヒューストン、サンアントニオ、フォートワース、ダラス、遠くはオクラホマまで委託販売で、鉄道で輸送された (新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1249).
26. *Ibid.*
27. テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の展示パネル “1890 In the Rio Grande Valley.” この展示パネルには、『渡米雑誌』について1902年 (明治35年) のものと記されているが、筆者が確認したところ、1905年 (明治38年) 発行の誤りである.
28. Walls 1987, *op. cit.*, p. 106; 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1249.
29. 米国で温州みかんは、苗木が薩摩 (鹿児島県) から出荷されたことから、「サツマ・オレンジ」

- や「サツマ・マンダリン」と呼ばれている。
30. 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1249.
  31. *Ibid.*; Walls 1987, *op. cit.*, p. 106.
  32. 新日米新聞社編, pp. 1249, 1256; Walls 1987, p. 106.
  33. 新日米新聞社編, pp. 1249, 1256.
  34. 新日米新聞社編, p. 1256; Walls 1987, *op. cit.*, pp. 106-107.
  35. 新日米新聞社編, pp. 1249, 1250.
  36. *Ibid.*, p. 1256; Walls 1987, *op. cit.*, p. 108; テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の展示パネル“The Shimotsu Family.”
  37. 新日米新聞社編, pp. 1249, 1256.
  38. Walls, Thomas K. 2007. “The Early Japanese Texans.” In *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*, pp. 91-111, edited by Irwin A. Tang. Austin, TX: The it Works, p. 105.
  39. 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1262.
  40. Brady, *op. cit.*, p. 51.
  41. 松本紘宇.『アメリカ大陸コメ物語—コメ食で知る日系移民開拓史—』. 明石書店. 2008年, p. 153.
  42. Walls 1987, *op. cit.*, p. 104.
  43. Walls 2007, *op. cit.*, p. 98.
  44. Brady, *op. cit.*, p. 53.
  45. *Ibid.*
  46. 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1262. メキシコ革命の戦闘がリオグランデ川を挟んでエル・パソの向かいのフアレスまで迫った時、米国移民局は日本人と中国人に対する規制を一時解除して、エル・パソに入ることを認めている (*Ibid.*). ただし、米国はメキシコの日本人について、革命の暴力行為から逃れる避難者として、一時的に入国することさえ認めなかったという記述もある (Masterson, Daniel M. with Sayaka Funada-Classen. 2004. *The Japanese in Latin America*. Champaign, IL: University of Illinois Press, p. 59).
  47. Walls 2007, *op. cit.*, p. 105.
  48. 新日米新聞社編, *op. cit.*, pp. 1231-1232.
  49. *Ibid.*
  50. *Ibid.*, p. 1262.
  51. *Ibid.*, p. 1265; Brady, *op. cit.*, p. 53.
  52. *Ibid.*, pp. 1262, 1265.
  53. *Ibid.*, p. 1265; Brady, *op. cit.*, p. 53.
  54. *Ibid.*, p. 1262.
  55. 條・ロバート・ケント、筆者による電子メールでの取材、2022年8月19日.
  56. 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1262.
  57. Hurst, James W. 2007. *Pancho Villa and Black Jack Pershing: The Punitive Expedition in Mexico*. Westport, CT: Praeger. ツトム・メキシコでの珍しい体験や、失敗に終わったパンチョ・ビリヤの暗殺計画については、第4章に詳細に記されている.
  58. Kato, Naoko. 2007. “Japanese Texans after World War II.” In *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*, pp. 255-262, edited by Irwin A. Tang. Austin, TX: The it Works, p. 256; Russell, Jan Jarboe. “The Road from Crystal City.” *Texas Monthly*. Volume 43, Issue 1. January 2015 (pp. 98-99, 177-179), p. 177.
  59. Russell, p. 178.
  60. *Ibid.*; Kato, *op. cit.*, p. 256; Walls 1987, *op. cit.*, p. 210; 新日米新聞社編, *op. cit.*, p. 1258.
  61. Kato; Russell.
  62. Kato; Evan K. Taniguchi. 筆者によるインタビュー、オースティンにて、2022年8月18日.
  63. *Ibid.*, p. 257.
  64. Robert Kento Dyo. 筆者による電子メールでの取材、2022年8月19日.